

この本を薦めます

学会誌編集委員長 佐々木 葉

第 18 回



木村 優介

正会員 国土交通省 国土技術政策総合研究所 研究室
学会誌 月評担当

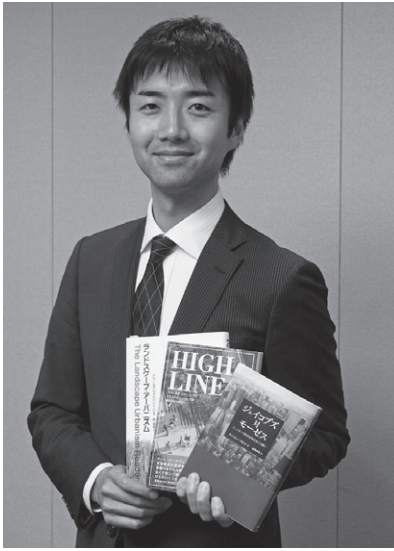
今月は若い方にお願ひしました。学会誌奇数号の月評ご担当の木村さんのお薦めは、これからの土木の可能性を広げるヒントがちりばめられた3冊です。

京

都大学で計画・景観分野で学位を取得された後、すぐに国

土技術政策総合研究所で同様の分野の政策推進の仕事を担当されるようになった木村さんは、実は親子二代の土木屋である。父の背中を見ながらも、独自の新しい土木の世界の可能性を模索する。未だおぼろげながらそのイメージを刺激する三冊を挙げていただいた。

まずは『HIGH LINE』。いま



KIMURA Yusuke

1986年京都市生まれ。京都大学大学院修了後、2013年より現職。専門はインフラ再利用と都市再生、景観形成。現在は歴史まちづくりや道路空間の再編に関する研究に従事。

やニューヨークの観光名所ともなった

このプロジェクトだが、土木屋さんは

案外知らない。廃線となっていた鉄道

高架橋が緑のスペースに生まれ変わ

り、都市再生の要となった。歴史的構

造物の活用という範疇を越えて世界が

ここに注目する理由は、そのプロセス

にある。たまたまある会合で隣り合わ

せになった二人の若者が、全くの試行

錯誤によって高架橋と地区の再生を

実現していくまでの道のりを、この本

は交互の語りで綴っていく。

人と人との個人的で生々し

いつながりが、大きなプロ

ジェクトを動かしていく。

新しい活動の可能性に満ち

たこの展開は、多くのまち

づくり本とはひと味違う物

語として十分に楽しめる。

次いで『ジェイコブス対



HIGH LINE
—アート、市民、ボランティアが立ち上がるニューヨーク流都市再生の物語—

ジョシュア・デイヴィッド、ロバート・ハモンド：アメリカン・ブック&シネマ



ジェイコブス対モーゼス

—ニューヨーク都市計画をめぐる闘い—
アンソニー・フリント：鹿島出版会



ランドスケープ・アーバニズム

チャールズ・ウォルドハイム：鹿島出版会

モーゼス』。ジェイコブスは世界で最も著名な女性都市論者であり、近代合理主義の都市計画や開発への鋭い批判を続けてきた人物だ。対するモーゼスは大戦をはさみ1970年代までニューヨークのインフラ整備や開発を推進してきた行政サイドの人物。読み物としても楽しめるこの二人の論争は、土木分野のわれわれがたびたび遭遇する住民対行政という二項対立の典型的な形でもあり、HIGH LINEとは対照的である。しかし一見時代遅れに見えるこの構造を通して、どちらの考え方にも学ぶべき点がある。これまで批判的にされたモーゼスの活動が再評価されていることを受け止めたという。

最後はかなり専門性の強い一冊で、1990年代からアメリカで話題になっているランドスケープの可能性を論じたものだ。都市と自然を対立的に扱うのではなく、新しい視点から新しい環境を創造していく手法は実は土木空間に広く適用されている。インターチェンジや河川に展開された事例写真から、土木技術者自身によるこうしたデザインの可能性に想いを広げることができる。

皆アメリカの本ですね、と尋ねると、それは意識していなかったとのこと。木村さんが無意識にこの三冊から感じ取っていたのは、異質なものが高密度に交錯し、新しい何かを産み出す土壌となる社会の力なのかもしれない。